

## 失われた環を求めて

東京外国語大学長 亀山郁夫

皆さま、お元気でお過ごしでしょうか。

今日は、まず、皆さまにうれしいニュースを報告したいと思います。2010年4月に入学した新入生のほぼ9割が、東京外語会に入会してくださいました。社団法人に衣がえした外語会にとってこれにまさる喜びはないと思います。と同時に、私として、いくつか残念に思うことがあります。それは、私(昭47年卒)とほぼ同輩の方々の入会率、というより外語会に対する関心が著しく低いという事実です。大学時代のクラブ仲間の集まりなどでも、折りにふれて入会を呼びかけるのですが、反応は芳しくありません。理由はいくつかあります。私と同世代の卒業生は、全国に学園紛争の嵐が吹きあれた1960年代末に入学していることです。大学という「システム」に入り込むことで、逆に決定的な傷を負った世代です。大学は、ある意味で、「敵」として意味づけられている悲しい現実があります。そうした状況は、嵐がほぼ終息する1970年代半ばまで続きましたから、同窓会を通しての交流、大学支援といってもピンと来ないにちがいありません。しかしもともとは日本の高度成長を支えた実力ある人たちばかりですから、かりにバブル崩壊時のさまざまな曲折があるにせよ、今からでも外語会の活力源となって頂きたいと切に念じているところです。もう一度、母校を振り返り、大学の将来をいっしょに見つめてほしいと祈っております。では、どうやってそのために具体的な道を開くか？ これは、私たち全員で考えなくてはならない問題です。

さて、仮にもし、この嵐の世代を、第一の「ミッシングリンク」と呼ぶことができるとするならば、第二の失われた「ミッシングリンク」は、2000年代の卒業生がそれに該当します。個人情報保護が声高に叫ばれだした2003年から2008年までの卒業生に関する情報が著しく少ないのです。保護法の施行が2005年4月のことから、やむをえない事情もあるのですが、しかし今後、外語会がさらなる発展を遂げていくには、やはり世代の空白は避けなくてははいけません。

環(リング)が、リンクが失われて、連続性を絶たれているという事実が問題なのです。その方策をどう立てるか、これまた会員一人一人が意識しなければならない問題ですが、私たちとしてできることは、外語会そのものが、さらに魅力ある法人へと脱皮しつつっていくことだと思います。外語会の内部に若い卒業生による「平成の会」が立ちあがりました。今後の活躍に期待が膨らみます。

さて次は報告です。ご存じのように、この4月1日、私たちの宿望であったアゴラグローバルがオープンしました。文科省施設整備費、目的積立金、異文化交流施設建設募金(通称「椅子基金」)が財源です。募金活動にあたっては、外語会の皆さまから大変なお力添えを得ました。いま、この施設の概要について改めて触れることはしませんが、施設の目玉は何といっても501人を収容する「プロメテウスホール」。外語会の皆さまにも、折りにふれて活用していただけると幸いです。次に特筆したいのが、第1期中期目標中期計画期間の法人評価です。3月末に文科省が発表したデータでは、86国立大学法人中、本学はじつに9位を占めています。喜ばしい限りです。また、毎年、朝日新聞社から出されている「大学ランキング」(2011年版)では、「専門性が身につく」「大学を愛する」の項目で全国750近い大学のなかでトップに近いランクを占めています。しかし喜んでばかりおれません。これらの高い評価をばねに、今後、一人でも多く優れた人材を育て、就業力に優れた本学の伝統を守るために、不断に改革の努力を怠ってはなりません。全国的な知名度という点でも、本学はまだプレゼンス面に問題があります。「外国語」という言葉が今の受験生の心になかなか届きにくい現実があります。本学が、単体としてどこまでも個性ある大学として輝きつづけるために、今後、全力をもって改革に取り組んでいく所存です。どうかこれまで以上に温かいご支援を賜れば幸いに存じます。